

存寄候故、筆末是に及申候。以上。 鳩 巢

## 一、牧野養潛小傳

先生姓は牧野氏名は成仁、後避仁字成實に改む。字は養潛、父名某稱左平次、彦根侯井伊直興に事ふ。左平次卒して後、秩二百五十石を食て使番となれり。駿州の産也。延寶四年丙辰彦根の士數十人、有故辭し去る。先生も其人也。彦根侯大に怒て追て仕途を格す。先生京に赴て山崎嘉が門に遊學すること數年也。嘉晚年神道を好で新に赤幟を立つ。先生不敢、専ら程朱の學を講ず。嘉卒して一歳を經、天和年中先生本藩に來住す。室師禮及堀部養叔等舊知の故也。信從する者頗る多し。本藩理學を唱る實に此に基す。執事豊後守村井親長師尊之、分宅一區使之安處。元祿三年庚午六十二歳、余兄弟初て贅見す。余年十六歳也。先生爲人端正重厚寡言、寓于本藩十有七年、元祿丁丑の比、舊君彦根侯の召に因て歸復す。本姓に復して牧野左平次と稱す。流寓の間は稱羽黑氏。祖某事尾張公光友、采地を羽黑の邑に受く因て稱焉。

## 一、盛三派のこと

先師常に曰。主敬の工夫非一般、其要心氣をして丹田にし著くるに在り、暫も放散すること無くして其功を見る。且笑て曰。近年佛氏の内盛三と云者、一派を起して盛三派と云。其徒終日相聚て勇猛心と云ことを工夫し、張四肢怒目背、下氣丹田心裏不容一物を、是を名けて勇猛堅固之工夫と云。又仁王座禪と號す。方外之業不足以稱、是非敬して不恭の甚しきなり。唯り其心を丹田に下し著るの工夫は主敬の要也。

## 一、山崎闇齋佛を去つて儒に歸す

先師曰。山崎闇齋柯、幼穉の時、父母命じて僧とし叡山に住せしむ。于時神宗の大通院といふもの、叡山へ登て是を視、大に異とし己が弟子とす。其後柯妙心寺に至り、欲講碧巖集。僧徒大に笑て曰。不滿五十歳則不許講碧巖、何汝之卒爾哉。柯聞て笑て曰。講書有年之老壯何乎と。乃去て大徳寺に至る。寺中の僧徒碧巖講の事を聞て不敢入門。柯怒て曰。非佛道而無道歟と、初て歸儒。是歸正之一端也。嘗て土州刺史豊昌の老臣野中主計、好學小學を尊尙すれども無師、洛下に柯ある事を聞て聘招す。柯土州に至

る。一歳を經て諫諍を納る。主計と不合去て京に歸る。柯家貧窮父母の養を闕くに至る。主計頭井上正利の學を好む事を聞て、乃東都に赴き井上の第に直訴して曰。某柯有父母而養ふに無便、請ふ事へんと。正利固より柯が學業を知て許之。其後會津侯保科正之、正利に因て柯を得ん事を請ふ。正利諾す。柯固辭す。聘招三度に及ぶ。終に會津に至る。請ひて冬三月は在京師。會津侯の學業は、皆柯之功也。侯卒して後嗣君正信不好學、故に柯去て歸京。此後不求仕。柯後改嘉。晚年神道を好みて大に門弟子と睽離す、可怪と云。